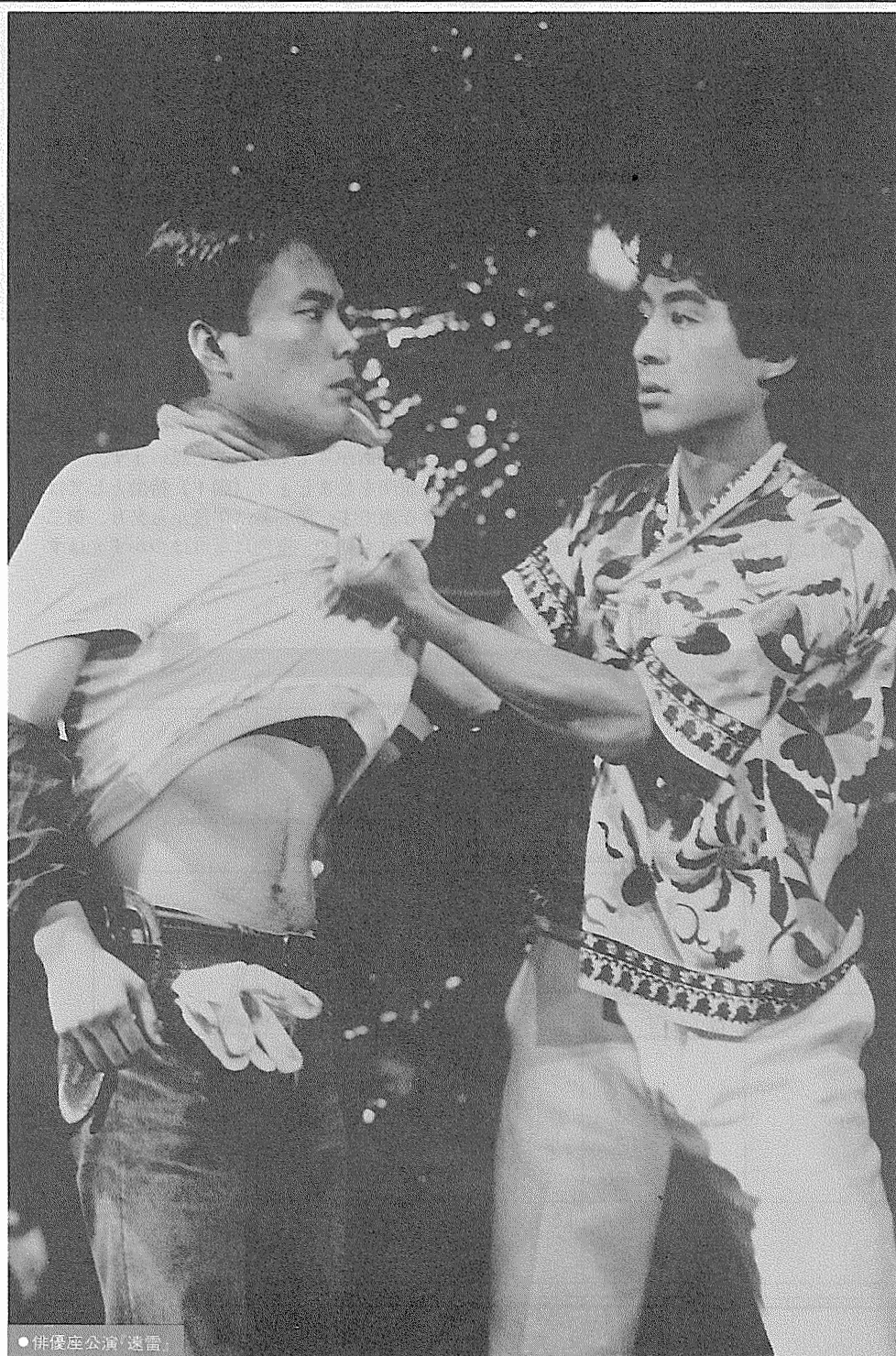


●マルモ・ライティング・ニュース

MARUMO LIGHTING NEWS

光と言葉が交す……



●俳優座公演「迷宮」

3

1985-3★VOL-55

仕込図の書き方・読み方

●皿田圭作

活躍する照明家にきく

●中山功

光のエッセイ

●荒川哲生

●水原英子

仕込図の書き方・読み方

皿田圭作

(S・L・S)

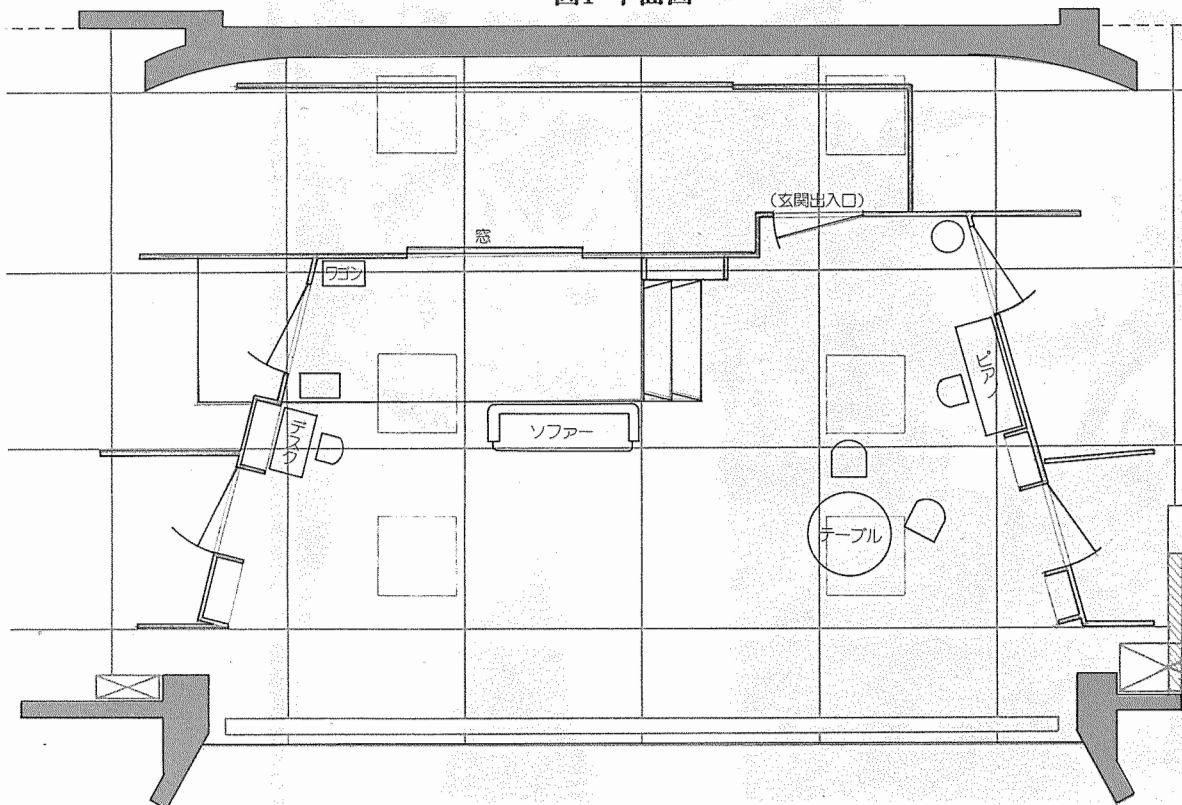
右の図面は劇団NLT公演『世の中みんなテスト病』の仕込図です。(I・ワラック原作、A・ユツソン脚色、飯沢匡演出、賀原夏子、黒柳徹子、轟目亮等出演) 壁で囲まれたリアルな室内のセット(宮内裕装置)で仕込図の書き方・読み方の適当な参考例としてとりあげました。

丸や二重丸、四角等の記号その他の書き込みは凡例を見ればそれぞれスポットライトの器種、吊り位置、使用するカラーフィルター等を示していることは分かります。しかし全体としてどのような方針で照明を作ろうとしているのか、仕込図を見なれていない人にはいささか読みとりづらいのではないのでしょうか。又実際に自分がデザインする場合でも、この図面を参考にしようにも、手がかりがつかみ難いと思います。

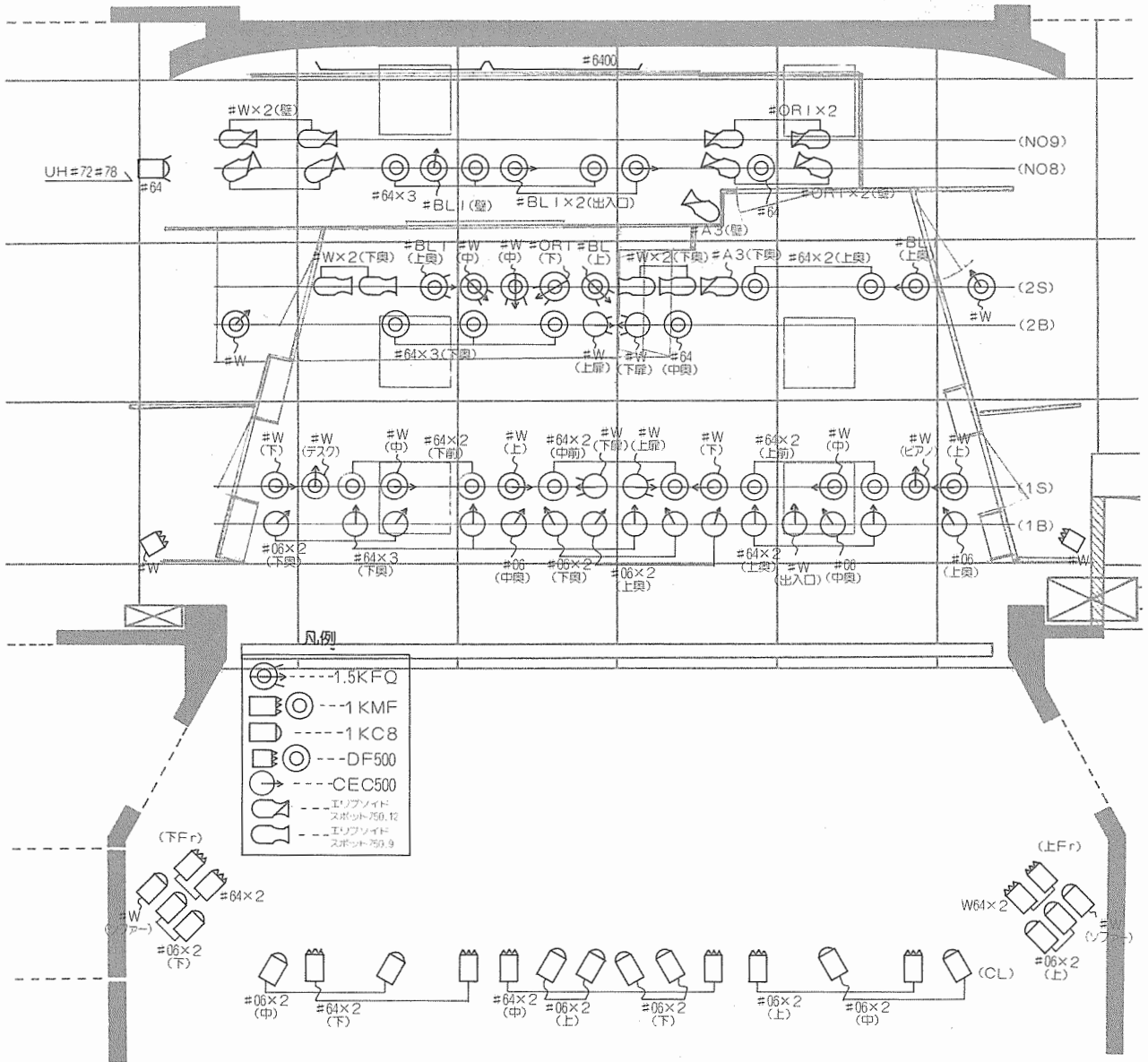
そこで、理解し易いように、このデザインの過程を順を追って説明してみましょ。そうすれば一台一台のスポットの用途が分かり、丸や四角の行列の間から主体的な光の映像が浮かびあがってくることと思います。

まず平面図の説明をしましょう。(図1) 特徴としては正面下手の大きな窓です。第一幕は午後から夕方、第二幕・第三幕はいづれも朝で、室内に電燈はつかず光はすべてこの窓を通してのものです。

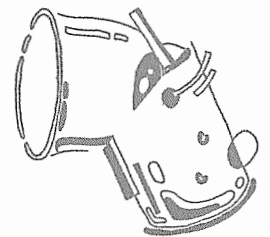
図1 平面図



仕込図



●劇団NLT公演『世の中みんなテスト病』



キライト

そこでこの照明プランの基となるキライトとしては、この窓からの光線となります。(図2)しかし奥行のない紀伊国屋ホールの条件を考えて、室内には直接日光は差し込まず、すべて間接光線ということにしました。但し喜劇調の戯曲の雰囲気をも損わないように室内は極力明か

るく作することを心掛け、その為視覚的に大きな部分を占める広い窓の外とのバランスに気をつけます。この、外の部分を唯一直接日光の当たる場所と設定し、光源(太陽)の方向を示す光線を第一幕では上手から、第二・三幕では下手から、各々エリプソイドスポットに種板を入れて、木の葉洩れの光を人物と壁に当たるように仕込みます。(図3)

一幕後半、やや暮れた時も窓の外が寂しくならぬように別回路で#A3の一台が壁に残るようにしました。

図2 キライト——窓からの明り

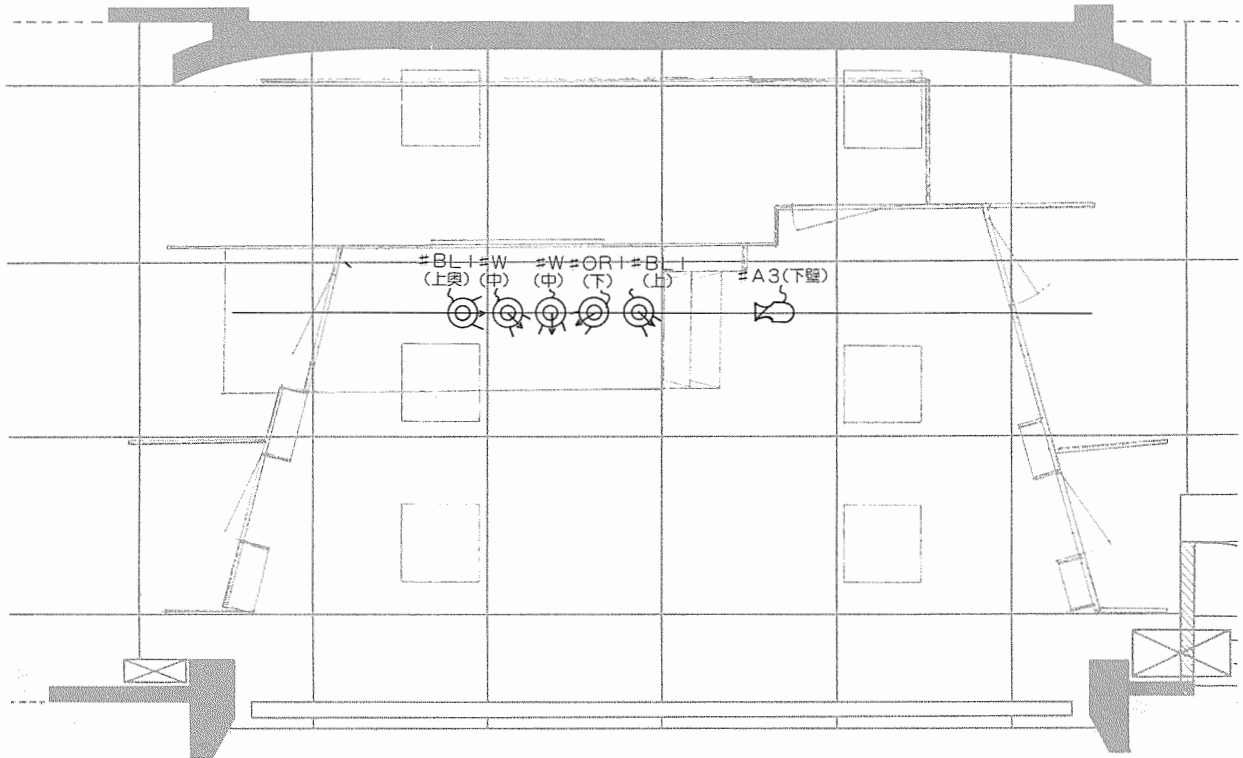
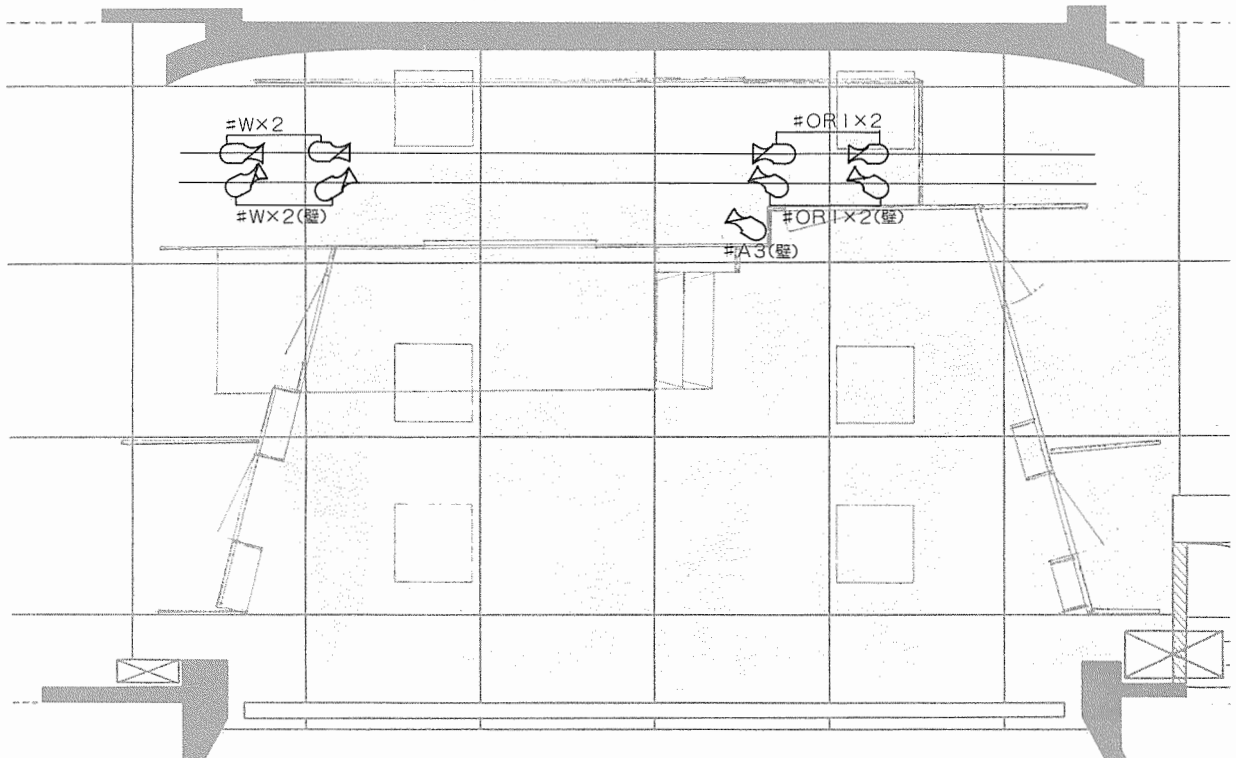


図3 キライト——光源(太陽)の方向を示す



アクティングエリアの照明

人物を明かるく見せる為に、仕込のスポットライトの大部分はこの用途にあてられます。アクティングエリア

を前・奥・その各々を上中下の六区分に分けました。(図4)

ここで下前の部分の仕込を例にとってみます。(図5) 光は奥や上手から入って来るので、上手側にアクセントがつくようにサスペンションスポット、前明り共に上手・下手を別回路にしました。

図4 アクティングエリアの区分

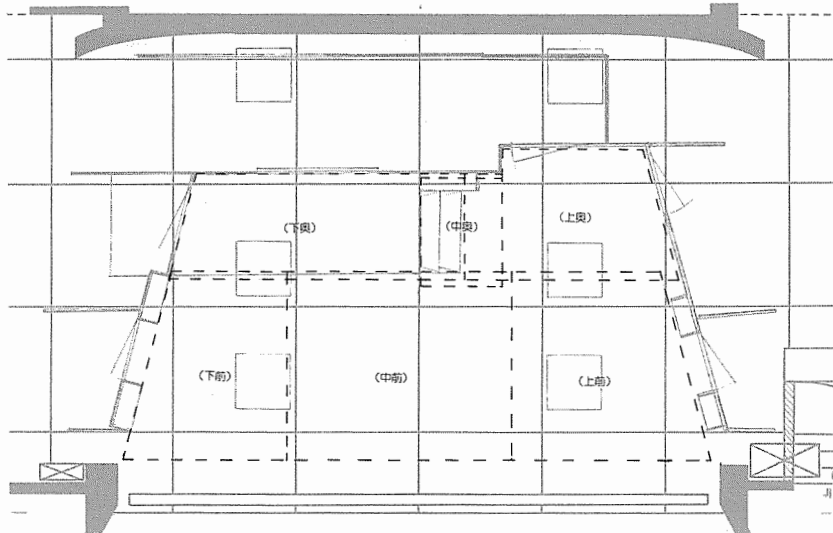
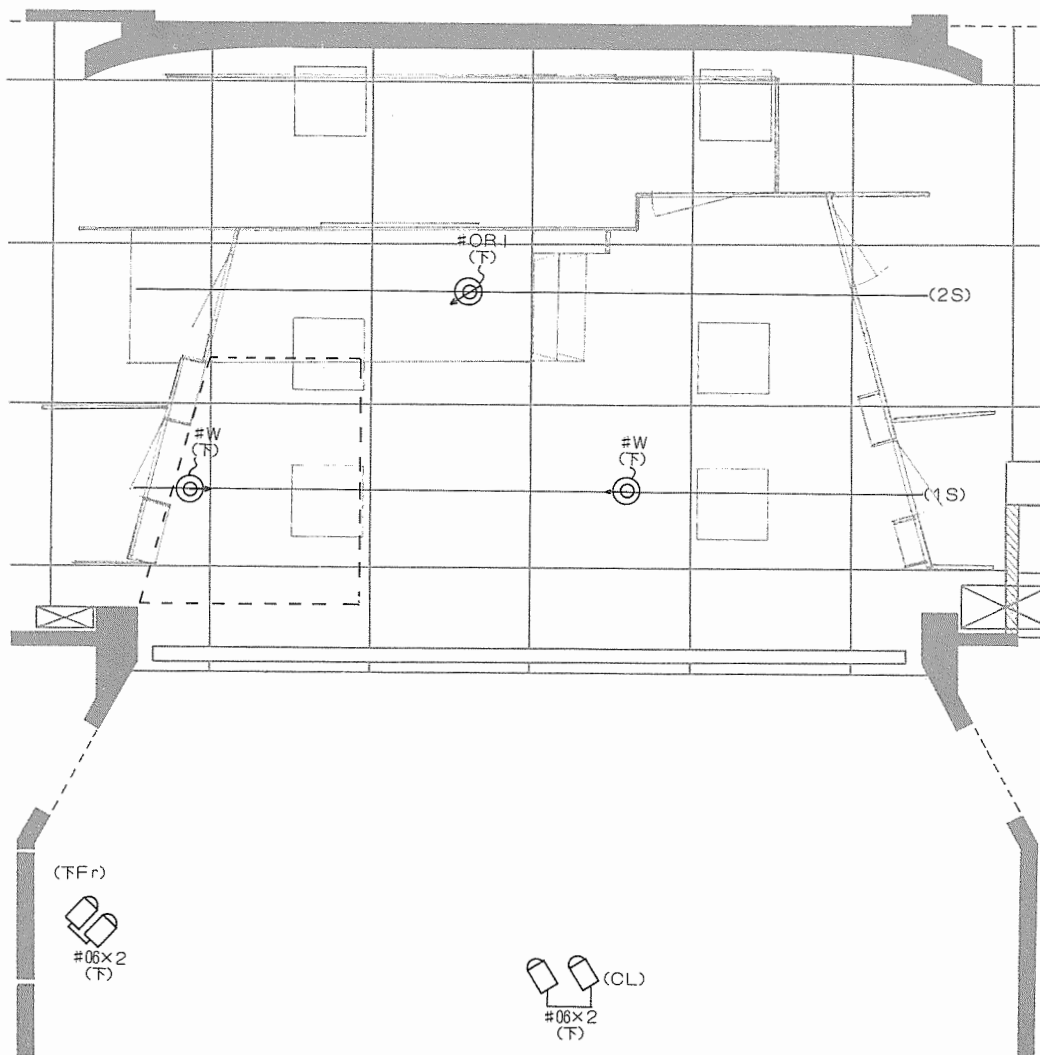


図5 下前の仕込



下奥の仕込は他の部分とやや違います。(図6)

窓にはめ込んであるアクリルに直接光が当たるのを最小限にする為、サスペンションスポットをエアソイドスポットにして、厳密に窓を避けて当りを決めました。このようにして 各区分全部にスポットライトを仕込みます。(図7)

ここで沢山使っている#06というカラーフィルターは、ロススーパーゼルのストロー系の一番淡い色です。強い光量で使うと、べったりした色づけにはならず、かといってナマ明り(カラーフィルターを使用しない光)とも違った、はなやかな透明感のある雰囲気が出せるので、アクティングエリアの色に私はよく使います。

図6 下奥の仕込

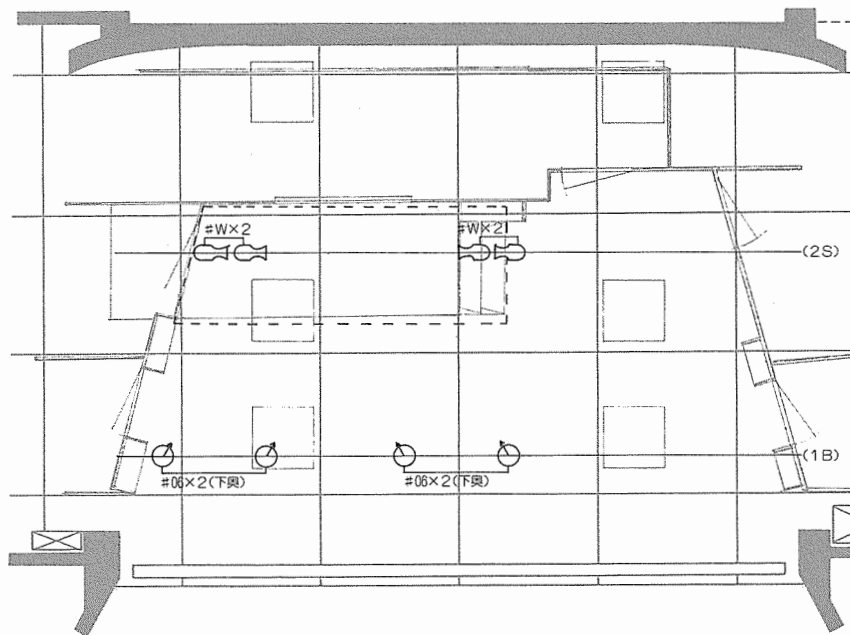
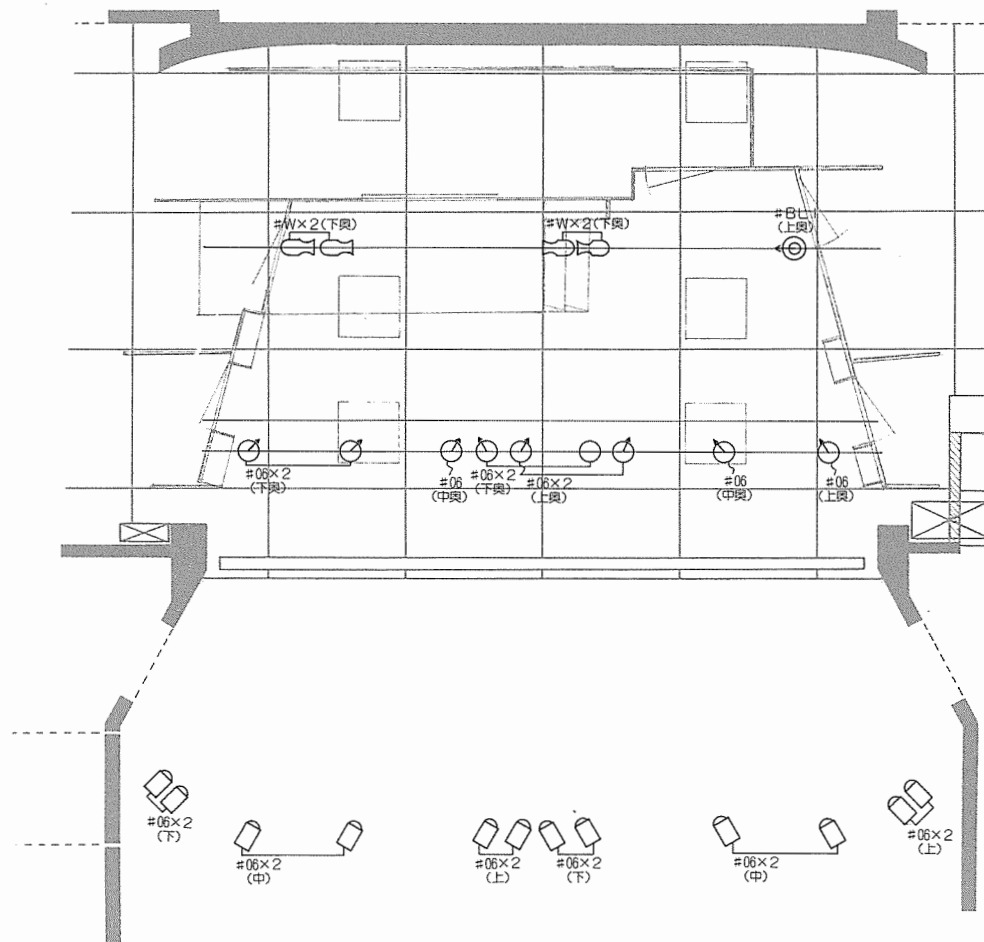


図7 アクティングエリアの仕込



horizont の照明

窓外の壁から劇場の水平壁までの間隔は30cmもなく、これで水平に凝った照明をすることは全く不可能なので、ただ光量だけを得る為に壁の上部にストリップライトを吊り、全回路に#6400一色のみを入れて

使用しました。アッパー水平ライトは#72と#78です。(図10)

この他に上手ピアノ、下手タイプライター机、中央ソファ等、重要な演技の行われる所、またはアクティングエリアの端でやや光量の足りなくなる所を補う仕込を加えました。(図11)

以上の仕込を全部一枚に書き込んだものが冒頭の図面です。

図10 水平の照明

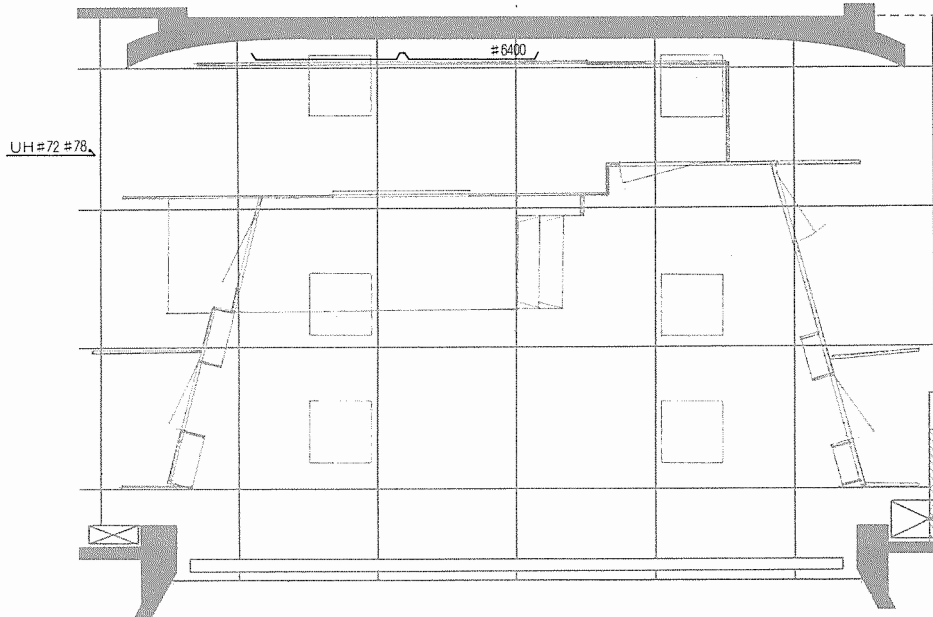
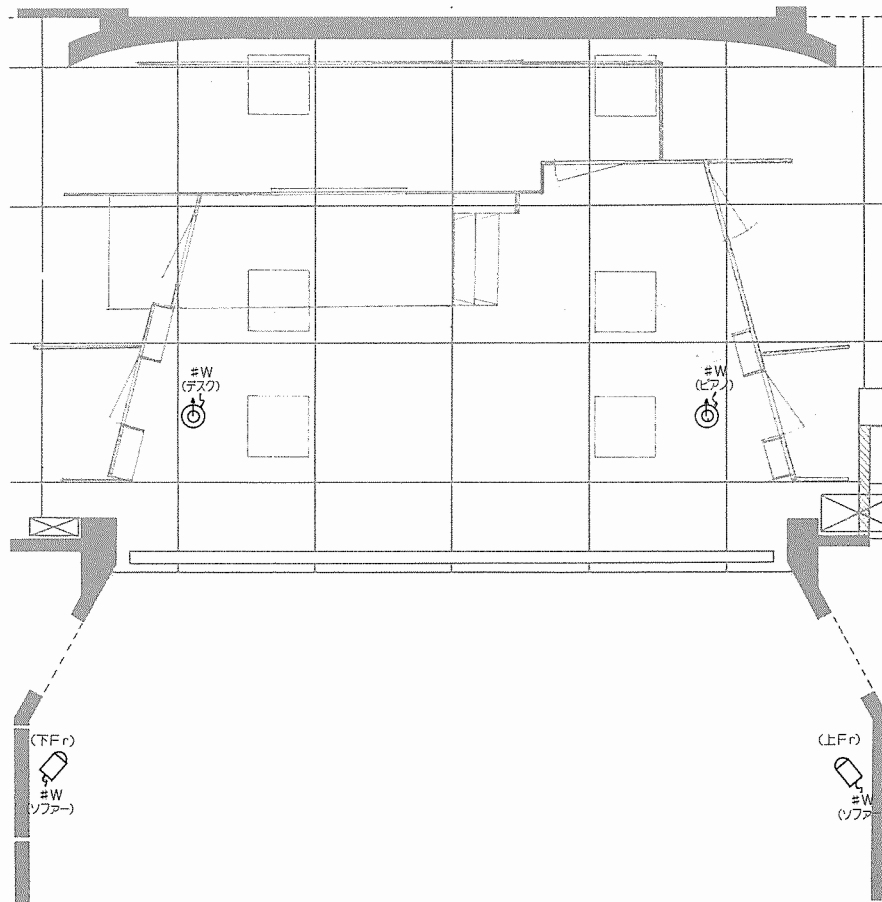


図11 重要な所を補う

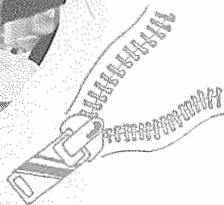
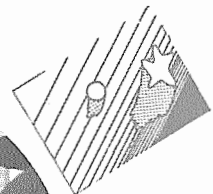


活躍する照明家に

きく

中山功

(S・L・S)



新人教育

照明をやりたいという人が入ってくると、まず3ヵ月間の研修期間を過ごすことになります。いわばお見合いの期間ですね。その間は現場につれていって、実際にはなにもしないで、先輩がやっているのを見てもらう。大体照明をやりたいといってくる人は、できあがった明りを見て、感動して来るわけで、その裏にどれだけの苦勞があるのか、何も知らないわけです。

3ヵ月間、現場で苦勞している姿を見せて、それでもまだやりたいとなったら、見習いとしてフォローをやっている人のとなりなどにつけてみます。そこでも、主に先輩の仕事を見ているだけですが、時間がある時や、客入れの前などに練習をしたりします。

その段階がすぎて、少し慣れてきたら、やさしそうなところでやらせてみる。で、やってみると、どんなにやさしそうでも、やっぱり技術はあるわけで、最初からうまくできない。でも、それを見れば、大体なんとかなりそうだなというのはわかります。

フォローをまかせる時期というのは、人によって違いますね。その人の器用さによる。本当に不器用な人もいますから。ただ、フォローは不器用でも、色彩感覚がものすごくいいとかありますから、いちかいははいえませんが、しかし、あくまでもぼくたちは技術の集団だから、やっぱりフォローもできなきゃこまる。

フォローの楽しさ

具体的なフォローのノウハウというのはあります。たとえば、長時間同じ姿勢でやるわけですから、どうやって手を支えたら一番いい状態になるかとか。

そういったことは、経験している人のほうが詳しいわけですから、具体的に目のまえて教えていきます。だけど、本当のフォローの楽しさ、難しさを知るのはそのからなんです。あとは、その人の感覚ですね。

フォローというのは、自分勝手にやるのではなくて、当然指定されたものですけど、それでもやる人によって個性がある。10人いれば10人10色のフォローがあって、どのフォローマンがいいといったことができてきます。

照明をはじめてみて、最初にやるフォローというのは本当に楽しいんですね。

いってみれば一人で一台を扱うだけの仕事ですけど、舞台全体が一番よく見える所で、実際に光に触れながら、それを動かすわけですから、楽しいし、感動もする。芝居が生き物だということもよくわかってきます。

慣れてくると俳優さんのその日の体調までわかるようになるものです。また、わからないようでは、一人前じゃないといわれますよ。

明りを覚える

旅の場合、プランナーはほとんど同行しませんので、ぼくらがプランナーの仕事を代行することになります。

最初にプランナーがつくった明りを覚えておいて、それを旅先でつくっていくわけですが、劇場の条件が違いますから、決して同じにはなりません。多少手直しをしたり、できない部分をもとの明りに近い状態にもっていくようにするわけです。

光の方向、明るさ、色といった基本的なことというのと、色や明るさといったことは、復元することは可能ですが、方向というのが難しい。直接に劇場の設備とかかわってきますから、同じ方向というのができない時がある。

その場合、多少の違いを承知の上で器材を吊りかえるわけです。そうすると、影の出方などが全然違ってきます。それをどうやってもとの明りに近い状態に復元するかというのが旅先での大きな仕事になってきます。

従って、まず明りをしっかりと覚えるというのは大切なんですね。ただ、これは長い事やっているのと、目で完全に覚えられるようになるものです。

仮に明りの数が200ぐらいあったとして、それを暗記しようとするの大変ですけど、芝居の流れのなかでつかまえていけばそれほど難しいことではない。芝居を覚えることと同じなんです。

自然から教わる

ぼくは穴沢喜美男さんのところで勉強しましたから、穴沢照明のいいところはできるだけ身につけようと思っていましたし、今でも、照明プランを考える場合、穴沢さんの明りは一つの目安になっていると思います。

また、舞台照明というのは、基本的には、自然から教わるしかないものだと思っています。ただ、そうかといって自然の再現はできっこありません。どんなすてきな夕焼けシーンをつくっても、自然の再現にはならないでしょう。

ぼくらの仕事は、自然のなかのごく一部を拡大再生産していくということではないでしょうか。

これからの仕事でも、自然に教わりながら、それを自分のプランのなかに、うまく生かしていければなと思います。

「光の仕事」との遭遇

—昭和20年代後半の一新劇研究生の話—



荒川哲生

◎(あらかじめつお)演出家 オスボーンの「怒りをこめて振り返れ」をはじめ、イヨネスコ、ベケット、ウエスカ、オルビーなど、多数の欧米劇作家を紹介。また、シェイクスピア、ヒランテロなど欧米の古典の演出も手がける。



それは、昭和26年の3月のある日のことであった。当時、私は、早稲田大学の一年生で、満19才の終点に近づきつつあり、何か生きていくことへの不安に憑かれていた。そして、その不安のエネルギーが、私を、それまで予想もしていなかった方向に衝き動かそうとしていたのであった。

その日、私は、東京信濃町の、当時まだ真新しくった文学座のアトリエのホールの中において、ただ一脚そこにしつらえられてある椅子に腰をかけていた。そして、その私の目の前には、四人の大人達が、それぞれの名をしるした半紙の付いている机越しに、一列横隊に並んでいた。それは、演出家の戌井市郎氏、装置家の河野国夫氏、照明家の穴沢喜美男氏、そして音響効果家の園田芳龍氏等面々の姿であった。だが、何という時の無情か、戌井氏を除いての御三方はすでにすべて他界されている。

さて、その日を遡ること一ヵ月ほど前、私は、東京新聞の紙上で、「文学座舞台技術研究生募集」という小さな広告に目を留めていた。そして、その広告を見ながら、それまでに、たった2度だけ観たことのある新劇——それは、チェホフの『桜の園』とウィリアムズの『ガラスの動物園』であったが——のことを思い出していた。正直に言って、それらの舞台には、たとえ新劇について何一つ知らない未熟な観客であったにしても、私には決して満足いくものではなかった。にもかかわらず、私は、何か引きつけられるようにして、文学座受験の願書を出していたのである。

そんな無知識の私であったから、しかも試験日を取りちがえ、定刻より1時間も遅れて試験場に行った私であったから、試験官の質問には、何一つまともなことは答えられない。勿論、私は色々なことを口にはした。そればかりか、逆に、試験官に質問までした——パンフレットによれば、『桜の園』は喜劇だと解説してあったが、自分が実際に観た舞台はととても喜劇とは思えなかった。新劇で言う喜劇とはどんなもののかを言うのか教えて

欲しい、などと。試験官諸氏は苦笑していた。やがて、面接の最後が来て——「ところで、君は、この研究所に入ったと仮定して、一体何をやりたいのかね。」と、当然の如くに問われた。私は窮地に陥った。何をやりたいにも、それがわからないからこそ、演劇をその「巻の一」から学びたいわけで、私にとって、何がやりたくなるのかは、それから先の事であったのだったから。しかし、その時、実際に、私の口をついて出て来た言葉は——「照明かなんか」というまことに曖昧で頼りないものであり、それは、試験官を再び苦笑させる態のものであった。しかし、それには、その理由があったのだ。即ち、半紙にしるされている名の中で、私は、偶然にも、穴沢喜美男氏の名前だけを知っていたという。

こうして、まさにど素人の私は、文学座の研究生として、50人の同級生——その中には、後に「四季」でその才能を開花させた装置家の金森馨や、現在「円」で役者をやっている三谷昇などがいた——と共に採用され、私は、ただ一人、ただちに、穴沢先生の下に配属された。翌日から私は、西も東もどこか南も北も分からぬまま、ドライバーを手に、暗い舞台裏を這いづり廻り始めた。劇場から劇場へと、当時、照明家として花形だった穴沢先生にひきつられて、文学座ばかりでなく、民芸、ぶどうの会、新協劇団等々の新劇団の公演をはじめ、オペラ、バレエ、あるいは児童劇、時には新派などの舞台裏でも働くこととなった。それまで、たとえ観客としてにせよ、滅多に劇場に出入りなどしたことのない私には、すべてが珍しく、毎日が、何か目の眩むようなリズムで過ぎて行った。そして一年後、私は、同級生の——彼等の殆どは、入所当時すでに多くの知識を新劇について持っていたのだったが——その誰にもひけをとらぬとばかりに自負出来るほどの経験を持つことになっていた。いわば、それは、舞台裏入門のインテンシブ・コースに学んだようなものであったのだ。

仕込みが終わると、やがて本番が始まる。大抵の時、私はフロントに配属され、スポットと共に客席にあった。それは、公演期間中、一回も欠かさず舞台を注視せざるを得ない役割である。それを背負うということは、幼い私の受けた演劇教育の中でも、最も貴重なものの一つであった。その頃のある日、私は、穴沢先生にこう問うたことがある——「どうしたら、演劇のエキスパートになれるでしょうか」と。この曖昧摸糊たる質問に、先生は、こうお答えになった——「与えられた一つの戯曲を、少なくとも百回読むこと」と。実際に先生がそうされていたかどうかは知らない。私にしても、いくら努めても、とてもそこまでは出来なかったが、その励まし故に、それでも、一つの戯曲を十回や二十回は読む習慣はその時植えつけられたのである。単純なことだが、これは、既に言及した一つの舞台を何回も観ることと共に、非常に貴重な演劇教育上の経験であり、その後の私の演劇人としての生き方を決定した重要な事柄の一つであった。

今も、鮮やかに思い出す、その頃、よく、早い時刻に劇場に出かけていって、誰一人いない暗い客席に身を沈め、闇の中に鎮まりかえっている舞台を、いつまでも飽かずにみつめていたことを。そして、書いては消し、書いては消すように思い描いたものであった、やがて、そこにそそがれる光によって浮かび上がってくる架空の

人生の時間と空間の醸し出す迫力を。そしてまたこんなことも思い出す——闇の中にいて、今はただ一人ぼつんと座っている孤独な自分が、やがて開幕のベルにはじまり、観客と共にその時間と空間を共有するようになって行く時、いつの間にかその孤独の殻の中から抜け出していることに気づき、驚きに似た感銘を受けたことを。その頃、劇場は、私にとって、孤独を捨てに行く唯一の安

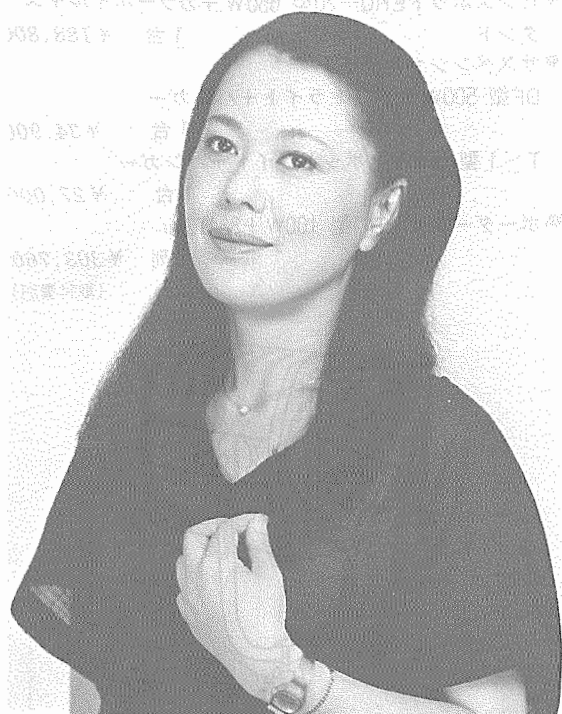
らぎの場所であったのだと思う。

ゲーテではないが、「もっと光を!!」と叫ぶものが自分の中であって、やがて、私は演出という仕事を選んで行った。光によって浮かび上がるに値する舞台をもっともって作るために。そして、それを通じて、自我というものを覆っている固い孤独の殻が打ち砕かれることのお機会の多からんことを祈るようにして。

舞台上で光る



水原英子



●(みずはら えいこ)劇団「民芸」所属。劇団の中堅女優の一人として、サマセット・モーム作『雨』のミセス・マクフェイル役や、『夢二・大正さすらい人』の彦乃役など、数多くの舞台で活躍

誰でも一度は映画スターにあこがれた時期というものがあるはず。「僕の初恋の人はバグマンなんだ!」「私はクラーク・ゲーブルが大好きで「風と共に去りぬ」を八回も見たわ!」、もうかなり良い歳をしたオジン、オバンが過ぎし日の胸のときめきを少年少女の如く目を輝かせて語るのを見ると、ああスターというものはなんとかけがえのないものだろうと思います。かくいう私もアラン・ドロンのファンで、雑誌から切り抜いたグラビア写真をスクラップしてうっとり見つめていた十代の頃を思い出します。それぞれのスター達が現実とかけ離れた画面の向こうから、我々にはかり知れない夢と希望を与えてくれました。今はどうでしょう、映画もスターも随分質が変わってしまいました。かつてキラキラと輝くばかりの光りで我々を魅了した大スター達は、映画黄金時代の過去の思い出として私の胸に焼きついているばかりです。

舞台というものは映画やテレビと違って残酷なものです。何故かといえば、全身生身をさらされるからです。悲しみや喜びを表現するにもアップはなし、声はマイクがひろってくれるわけでもなし、部分撮りでカメラがカバーしてくれるわけでもないからです。美しさを強調する為にレンズに紗をかけたり、ライティングで目を光らせてたり出来ないのですから、広い空間で観客の目を引き

つけるというのはひとえに役者の力量にかかっているわけです。勿論美しい衣裳を取替え引替えしたり、特別な照明を浴びて大劇場で華やかに観客の拍手やタメ息をさそう場合もあります。それも役者の力です。いくら美しく着飾ってライトを浴びてもちっとも光らない人だっているのですから。

光るということ。それは何なのでしょう。華やかな大劇場や、登場のたびの拍手とは無縁の新劇の舞台上で光るということ。役の良い悪いではなく、きれいきたないではなく、まさに「ああ、その役の人物がそこにいる」と思わせる生き生きとした存在感が生まれた時です。良い役者というのはどんな役を演じてもどこかで光っているものです。「あの人をもっと見てみたい」とか「早くあの人が出て来ないかな」などと観客に思わせるような役者になれたら最高だと思います。同業の私のような者が意地悪い目で見ているつもりでもつい引き込まれてしまう、そんな役者に出会うといつも、この人は日常どんな人なのだろう、とその人の生き方にとっても興味を持ってしまふのです。

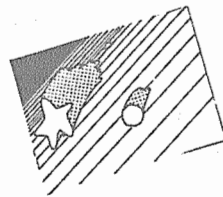
舞台とは怖いものです。嘘もかくしもなく、その人自身がさらされてしまう場所なのです。どんな風に演じても結果出て来るものは、良くも悪くもその人の全パーソナリティ以外の何ものでもないのです。ないものは出せない。時々、特別な人種を見るように言われることがあります「役者は嘘が上手いから注意しなけりゃ」、私はコチンときて「普段嘘ばかりついているような人間は、決して良い役者とは言えません!」と言い返します。バカといわれようとなんだらうと、自分に正直にムキになって生きているのが、役者としての財産だと信じているからです。舞台上の虚構も又真実なのです。

その人が部屋へ入って来ただけで雰囲気明るくなる、話をしてもつきない、つい目が行ってしまう程見ててあきないという人がいます、魅力ある役者は多かれ少なかれ皆そういうものを持っているはず。

そういえば昔誰かが言っていました。『俳優というものは、人間の宝石がなるべきである』とか何とか。そうでなくてどうして虚構の世界を生きて、現実の人生を背負った観客と立ち向かうことが出来るのでしょうか。『台本に登場するどんな小さな役でも、自分よりはるかにえらいと思え』と教えられたこともあります。だとしたら俳優になる為に特に選ばれたわけでもなく、とり立てて才能のある宝石でもなく、路傍の石ころのような私などどうすれば良いのでしょうか。かつてスクリーンの中にどっぷりとひたって夢見た少女は、恐ろしい迷路にまよい込んでしまったことを呪いつつ、虚構の世界で光る真実の瞬間を求めてさまよい続けるのです。

卒業記念に贈るMARUMOの照明器具

光が夢を語り、思い出を刻む



一すじの光との出会いは、若い心の中に限りない想像力をかきたてます。

一台のスポットライトに身近かに手を触れた時、その顔にはかけがいのない輝きがひろがります。

そこには、舞台照明という光の世界が教えてくれる、創造することへの期待と喜びとが息づいているのです。

MARUMOは、この感動をより多くの方に知っていただくために、卒業記念に贈る照明器具のラインアップを用意しました。

演劇部の活動はもとより、文化祭、入学式、卒業式、講演会、音楽会と学校生活の中で行われるさまざまな文化活動やセレモニー。

今、学校では、若い心が夢をふくらませ、感動をわかち合う、こういった場でのステージライトの活躍は欠かすことのできない、貴重な存在となっています。

さまざまな思い出を託して贈られる卒業記念にふさわしく、MARUMOの照明器具は、夢と感動を伝え続ける役割を果たしていきます。

★詳細につきましては、本社営業部か最寄の営業所へお問い合わせ下さい。皆様のご計画にあわせたプランをご用意いたします。また、ご希望の方には当社製品のカタログをお送りします。

大阪出張所

大阪市北区野崎町9-6(東梅田ビル) ☎06-312-1913-1922

名古屋出張所

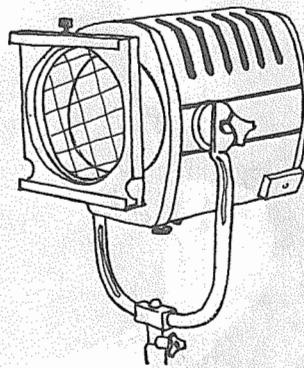
名古屋市中区栄4丁目1-1(中日ビル) ☎052-263-7425

福岡出張所

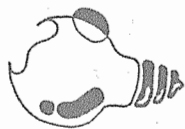
福岡市中央区大名1-14-45(福岡鴻池ビル) ☎092-741-4762

卒業記念に最適なラインアップの一例

- スポットライトCEC-II型 1,000W + カラーホイール + アイリスシャッター + スタンド 1台 ¥127,900
- ピンスポットERQ-20型 650W + カラーホイール + スタンド 1台 ¥188,800
- サスペンションライト
DF型 500W スポットライト + ハンガー 1台 ¥34,900
T-1型 500W スポットライト + ハンガー 1台 ¥27,000
- ボーダーライトBC型 100W + 36灯3cir 1列 ¥303,760 (取付費別)



編集室



●ライティング・ニュースでは、これまで多くの照明家の方に舞台照明についての原稿をいただき、同時に実際の仕込図なども掲載してきましたが、高校生やアマチュアの方には、この仕込図の読み方といったことが、なかなかつかみにくかったのではないかと思います。そこで、今回は皿田圭作氏に「仕込図の書き方・読み方」ということで、一枚の最終的な仕込図がどのような考えのもとに書かれているのか、また、仕込図はどのように読むと、それぞれの器材の役割を知ることができるのか、そういったことについて、多数の図版をまじえて原稿を書きいただきました。

●今回のエッセイは、民芸の水原英子さんと演出家の荒川哲生氏です。荒川氏は略歴でも紹介しましたように、60年代に数多くの欧米の劇作家を日本に紹介されました。なかでも、オルビーの『動物園物語』は、新宿文化劇場深夜演劇公演の第一回作品として上演され、60年代にはじまる我が国の小劇場運動の嚆矢となった記念碑的作品として知られています。

●ライティング・ニュースの「舞台照明の基本」などでもおなじみの小川昇氏が社団法人日本演劇協会より演劇功労者として表彰されました。これは、氏の長年にわたる舞台照明一筋の活躍と、いつも第一級の舞台効果をあげてこられた功績に対しておられたものです。おめでとうございます。氏は現在、新派の水谷八重子七回忌追善興行などで活躍されています。

●発行——丸茂電機株式会社

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(252)0321(代)

●編集責任者——井上利彦

編集協力——小川昇舞台総合研究室 東京舞台照明 レクラム社

●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●このニュースは弊店からお届けします。